

## ハス栽培における「クワイクビレアブラムシ」の発生消長とその防除について

川崎重治・斉藤久男・三好芳彦

(佐賀県農業試験場)

KAWASAKI, S., SAITO, H. and MIYOSI, Y.

On the Seasonal Occurrence, *Rhopalosiphum nymphae* Linne  
and the Control of East Indian Lotus.

ハス栽培での「クワイクビレアブラムシ」の発生は、初期生育を著しく妨げるだけでなく、収量にも大きく影響する。本害虫はクワイヤスイレンなどにも寄生することが知られているが、ハス栽培での発生生態は明らかでない。また従来有機燐剤による防除が行われたが、さらに適確な防除と防除労力の省力化を企図して1966年から3ケ年にわたり、発生消長の解明と有機燐剤の処理法と薬効を検討したので、その概要を報告する。なお、本試験実施にあたって有益なご助言を賜わった環境部病害虫研究室、宮原技師に深く謝意を表する。

## I. 試験方法

発生消長調査はハス栽培ほ場およびその周辺のクリークを対象に周年定期的に生息密度を記録した。防除試験は、1966年は薬剤の形態と薬効、次年度からは有機燐剤の処理量と処理時期、方法を検討した。1区1a, 2区制で用水の流動に注意し、処理時の水深は10cmとした。処理は水面施用と風乾土と等量混合し、団子化し畦畔から投入する投入処理を行なった。ハス栽培は現地の慣行事例に準じた。

## II. 試験結果と考察

## 1. クワイクビレアブラムシの発生消長

本害虫はハス以外に水辺のミズカンナ、ホテイソウ、ウキグサに生息し、とくにウキグサに多く。また水面上をよく遊泳し、活発に移動する。

初発の時期は、春先の気温によって若干変動するが、平均気温15℃前後となる4月中旬ごろからクリークや用水路のウキグサやコウキグサ上に、有翅態、無翅態でみられる。ハスの場合は直接飛来してくるものもあるが、ウキグサの流入とともに移動し、5月中旬頃から、浮葉や崩出まもない巻葉に寄生する。この時期の被害は大きく、後期まで尾をひく。その後、寄生密度は急角度で上昇し、6月～10月頃まで

に盛んに繁殖する。夏場は硬化した葉には生息しないが、若い立葉またはハス田内のウキグサ上に多い。平均気温で15℃以下になる11月中旬には、寄生植物の消滅で寄生度が急減する。

晩秋に入ってモモ、ウメ・サクラなどで卵態で越冬するとされているが、筆者らの観察では、1月中旬ごろのクリークで、日だまりで枯死を免れたウキグサまたはホテイソウに成虫態で散見された。

2～3月は確認できなかったが、これらが春先の第1次発生源となることも想像される。

## 2. 有機燐剤による防除効果

供試したダイシストン、エカチンTD、ジメートエートの各粒剤は、エカチン乳剤等の液剤と同じく、殺虫効果は速効的に現われる。処理後まもなく、苦悶状態を示し、1日で死亡し始め、3日目には完全に殺虫できる。a 当たり 300g の処理量で十分で、薬効期間は60日におよぶ。処理回数は1回でその目的が達成される。また、団子化しての投入処理も水面施用と変わらない薬効を示し、薬剤処理の能率化に役立つ。寄生の中間植物であるウキグサの防除をかねた殺藻剤との混合処理でも、単用処理と変わらない殺虫力と殺藻効果が発揮された。ハスへの影響は本試験の範囲では認めなく、処理区は約15%増収した。

## 3. むすび

クワイクビレアブラムシの発生は平均気温15℃前後から活発化し、まずクリーク内のウキグサに発生し、10月ごろまで繁殖する。ハスには5月中旬、浮葉や巻葉に発生し被害をもたらす。夏場も盛んに繁殖し、若い葉に寄生する。有機燐剤の薬効は抜群であり、発生初期に a 当たり 300g を水面施用すると、2ヶ月余にわたって発生を抑圧でき、慣行の防除法に比べて、省力効果が大きく、適確に防除できる。また投入処理や殺藻剤との混用処理の実用性を認めた。